（別紙２）

審査の結果の要旨　　氏名　桑原　俊介

本論文は、シュライアマハーが解釈学において用いる方法概念に着目し、その歴史的系譜を辿ることを通して、彼の解釈学の歴史的な独自性を明らかにする試みである。

第一部では、「言語と思考」に関わる方法概念が検討される。著者によれば、シュライアマハー以前の解釈学においては、言語の一般的な意味が著者の意図によって限定されるという前提のもとに、作者の意図を歴史的に再構成することが求められていた。これに対し、言語活動それ自体の内に言語と思考という二つの原理が存するゆえに、「文法的解釈」と「技術的・心理的解釈」は相補わなくてはならない、と捉えるところにシュライアマハーの独自性がある（第一章）。続いて著者は、こうした二つの原理をシュライアマハーの言語観を支える「図式」概念に即して詳細に検討し、カント及びシェリングの図式概念との比較を通して、シュライアマハーの「図式」概念が「解釈学的循環」の理論を要請した、と主張する（第二章）。

第二部は、シュライアマハーの解釈学の基礎的な方法である「追構成」をめぐる議論を論究の対象とする。まず第三章は、シュライアマハーがプラトンの諸著作を独訳する過程で従来の非歴史的なプラトン理解とは対立する「追構成」の方法に至った、と論じる。続く第四章は、シュライアマハーの「追構成」の理論をアストのそれとの対比において特徴づける。著者によれば、アストによる「追構成」は部分を全体の内に解消する傾向を持つのに対し、シュライアマハーによるそれは部分と全体との相互限定を説く点で、彼の解釈学の方法論の根幹に位置する。さらに著者は、シュライアマハーによる「追構成」が「歴史的追構成」と「予見的追構成」とからなること、また、「著者を、著者が自らを理解していた以上によりよく理解すること」というシュライアマハーの基本的な立場が彼の「追構成」の理論に支えられていることを明らかにする（第五、六章）。

第三部は、シュライアマハーの「一般解釈学」に関わる方法概念を検討する。第七章は、解釈学と弁証法との相補性を説くシュライアマハーの意義を、解釈学を論理学の一部と見なす従来の立場（トマージウス、マイアー等）との対比において特徴づけ、第八章は、シュライアマハーの聖書解釈学が従来のように神学的な背景を持たず、この点において一般解釈学を逸脱するものではない、と論じる。

17世紀から18世紀にかけての解釈学に関わる膨大な資料を踏まえ、それとの対比においてシュライアマハーの位置と独自性を精確に測定する本論文は、多くの点でシュライアマハーをロマン主義的と批判する（とりわけガーダマーに代表される）見方からシュライアマハーを解放することに成功している。著者は個々の方法概念に即して議論を構築しているために、シュライアマハーの解釈学の全体的布置の独自性がなお十分に浮かび上がっていないとはいえ、それはむしろ本論文を踏まえての今後の課題とみなすべきであろう。よって、審査委員会は本論文が博士（文学）の学位を授与するに値すると判断する。